1月セミナーを1月20日(土) 13:30~15:30に開催しました。

会 場 愛知文教大学 201教室

テーマ 「学び合う学びをヒドゥン・カリキュラムの視点で深める」

講 師 学び合う学び研究所フェロー 後藤 孝文先生

教師の身なりに関して、生徒に「爪の長さ」を指摘されたことがつい最近ありました。生徒は身なり点検を終えたばかりの頃で、「先生、爪長い!」と直球で指摘されてしまいました。この経験から、きっとその生徒は「先生は爪が長くても指摘されないのに」と少なからず、不満を覚えたことでしょう。

上記は、マイナスの要素の隠れたカリキュラムですが、日頃は私自身の人柄として、「笑顔でできるだけ怒らず」にいるようにしているので、生徒から廊下ですれ違いざまに、「先生、ヤッホー」と声をかけられます。自分なりに、この人柄はプラスの側面であると捉えたいですが、裏を返せば、「怒らないから何をしても言っても許される」と生徒には大なり小なり思われているでしょう。

温かいまなざしの指導や声かけと、毅然とした指導対応は表裏一体の関係で、バランスが非常に難しく、やりにくいなと感じている今日この頃です。ありがとうございました。

今日の講座で学んだ中で重要だと思ったことは、「まなざし」が教室の雰囲気を変え、授業を 変え、子どもの学びを変えていくことです。

「ヒドゥン・カリキュラム」はどうしてもマイナスイメージが強いですが、今日のお話から、そういった面とプラスの面があること、そしてそれが教師の「まなざし」で大きく変化していくことを考えさせられました。知らなかったこと、気づかなかったことを数多く考えることができ、とても有意義な時間になりました。我々の立ち位置や、表情が子どもたちの「学び」に繋がっていく重要な要素であることを再認識しました。多くの先生方の授業を観るときの一つのポイントとしていきたいと思う。

とてもいい学びになったと思います。もう一度、プレゼンの資料を読み返していきたいと思います。ありがとうございました。

今日の講座で学んだ中で重要だと思ったことは、マイナス面の自覚です。

教師は、人間性も含めて教師だということを、改めて教えていただいたセミナーでした。特に、ヒドゥン・カリキュラムにおける「マイナス面の自覚」は、大切なキーワードだと思いました。自覚するからこそ、プラス面も見えてきます。授業においては、そのプラス面を意識して、教室環境(雰囲気)を意図的に作る努力も必要ですね。

日本に訪れた外国の方は、日本人の民度がうらやましいとよく言います。例えば、道路にごみがほとんど落ちていない事実を目にすると、自分もごみが捨てられなくなるそうです。まさに、教室環境のお話とつながる部分だと思いました。今日のセミナーを聴いていって、日常生活に隠れている暗黙の了解が、国民性にもつながっているのだと思いました。学びの多いセミナーでした。ありがとうございました。

今日の講座で学んだ中で重要だと思ったことは、IRE パターン、教師の発言は評価を伴う、 発問→発言→発言の評価ということです。

① 我慢を学ぶ ②友達からの評価への対処を学ぶ ③教師への適応を学ぶ

社会生活に必要な技能や方法(ヒドゥン・カリキュラム)新しい視点でした。昨年度、不登校児童への声掛けで悩んでいたので、掛ける言葉の幅が広げられそうだと思いました。

今日の講座で学んだ中で重要だと思ったことは、マエストロ・演奏者です。

後藤孝文先生ありがとうございました。マエストロであり、プロをめざすトロンボーン奏者 であり続ける後藤先生のすてきな研修会でした。2時間があっという間でした。

先生にとっては当たり前のことですが、研究者として、緻密に理論や実践を調べ尽くし、教育の専門家として、自分の実践をリフレクションし、理論と実践を往還しつつ、わかりやすく伝えてくださいました。

また、自分を第一発言者にご指名くださり、とっても幸せに感じました。最近はほとんど意識されていないように思いますが、第一発言者の指名には何か大きな意味があるように思っています。

先生方と聴き合う中で、小牧市第一幼稚園の子どもと先生方、自分の孫のようすがなぜだか 浮かんできました。浮かんできたことをこれから整理したいと思います。

自分のアートカ、人間性、雰囲気、まなざし、becoming、差異、リフレクション、behavior…をさらに意識したいと思います。ありがとうございました。これからもいっぱい学ばせてください。

今日の講座で学んだ中で重要だと思ったことは、恒吉の日米比較から見た日本人のもつ教室 文化、イリッチの言っている「学ぶ力の劣化・無能化」がもたらす隠れたカリキュラムの存在 です。

最近読み返した内田樹の「日本辺境論」の中で、日本人は、どこか世界の中心たる「絶対的価値体」にどうすれば近づけるか、自分との距離の意識に基づいて思考と行動を決定している。この中心から外れた「辺境人」である日本人が思考し決定するのに強く関与するのが「空気」であり、こうした辺境人の意識が生まれた根源は千五百年前の歴史にさかのぼると述べています。恒吉の日米比較で指摘されていた事柄を拝見し、大きくうなずくと同時に、なかなか崩せない岩盤のような「空気」の手ごわさに呆然としております。

イヴァン・イリッチの提唱した「学びの劣化・無能化」に対して、後藤先生が示された仮説は光を感じます。資源の少なく経済成長のない辺境地に居る我々が、生き延びる上で死活的に重要な役割を果たす「学び」という営みは、温かいまなざしによる隠れたカリキュラムが大切であり、「学ぶ力・学びを発動させる力」も隠れたプラスのカリキュラムによって生み出されてくるものだと、教室の辺境から考えていました。ありがとうございました。

今日の講座で学んだ中で重要だと思ったことは、まなざしです。

後藤先生のヒドゥン・カリキュラムのお話を伺うのは2回目です。正直なところ、前回は、潜在的なカリキュラムなのか、意図して指導または支援した結果のものなのかというところが、しっくりこない部分もありました。今回2回目のお話を伺って、指導とか支援とはまた別の次元で、お互いの人間性が自然に伝わりあったり受け止められあったりするものなのではないかなと考えるようになりました。最後の指揮者のお話しは、胸に響きました。

後藤先生は、「キーワードはまなざし」とおっしゃいました。学びの共同体の佐藤学先生も、 「昔の教育は口で行ったが これからの教育は目と耳で行う。」とおっしゃいます。 一人一人の 成長や学びを暖かい目で、その思考や行動がどこから来ているのかを感じ取ったり心の声を聞いたりする、そういう姿勢が教師には求められるということだと私は解釈しています。自分の授業もそうですが、他の方の授業を見せていただく時も、子供たちのまなざしを見ることが今回大切だと学びました。

セミナーの中で S 中学校の生徒たちの様子を拝見しました。その時も、私は生徒たちのま なざしを見ていました。S中の生徒は仲間に向けるまなざしが何とも優しく暖かく素敵です。 それは一小一中で培ってきた相手へのリスペクトがそうさせているのだと後藤先生もおっし ゃっておられました。 私もそう思います。 この相手へのまなざしというのは、S中のみならず、 学び合う学びに取り組んでいる多くの小中学校で見ることができます。でももう一つ大切にし たいのは、生徒が自分の学びにどのようなまなざしを向けているか、ということです。苦しさ を抱えて隠してしまったり、学びから逃走してしまったりしている生徒は、まなざしを見れば 分かります。私が動画を見させていただく限り、学びから遠ざかっているまなざしの生徒は一 人もいなかったように見受けました。あの動画は、S中の先生が撮影したわけではなく、授業 公開日にスーパーバイザーの先生が撮影されたものだそうです。スーパーバイザーの先生方 は、良いところだけを見たり撮影されたりすることは決してありません。教室を回って、気に なる生徒はいないかどうかを熟視します。その動画の中に、学びから逃避している生徒がいな かったのです。スーパーバイザーの先生も、教室に入った瞬間、生徒たちのまなざしにひきつ けられたとおっしゃっていました。一人残さず学びを保障する、学びの独りぼっちをつくらな い、それが S 中学校の学び合う学びであることを生徒のまなざしが教えてくれました。では、 それができているのはなぜなのか、彼らが何をどう培ってきたのか。それも動画の中で生徒た ちが教えてくれています。

3年生の英語の授業で、先生から指名され、やっとの思いで「I think so」という一言を絞り出した生徒がいました。その前に行われた仲間とのやり取りはどのようなものだったでしょうか。前の生徒が発言したことに対して先生から、「あなたはどう思う?」と英語で聞かれた彼は、仲間の発言がわからなかったわけでもないし、自分の考えを持っていなかったわけでもないように見受けられました。ただどう表現して良いかわからずに困っていたように思われます。その時に彼がとった行動、それは、自分から仲間に助けを求めるということでした。動画だけではどのようなやり取りがなされたのかを定かではありませんが、推測するに「どう言えばいいの?」と尋ね、仲間が「○○君はどう思うの?」と訊き、「そう思う」と言うのに対して「じゃあ、I think so じゃない?」と教える。そんな様子が見て取れました。わからない生徒から聴き、訊かれたら一緒に考えて寄り添う、それこそがS中の学びの文化の根元だと感じました。数学の授業でもそうでした。多くのところで関わりが見られました。その関わりが教え合いになっているのか聴き合いになっているのかで、学びの質が変わってきます。わからない子から聞いていれば、彼らのまなざしが沈むことはないからです。

S中学校の複数の授業を拝見する限り、授業スタイルは学校として統一しているわけではなく、それぞれの教科、先生方に任されているように思います。でも、わからなさを大切にしたり仲間の困り感に寄り添ったりという小学校から身につけてきた学びの文化は、S小中の全先生、全生徒に尊重され、それが学校の学びの文化になっているように感じました。学校という

枠の中で尊重されるべきヒドゥン・カリキュラムとは、そういうものではないかと改めて学び ました。

今日の講座で学んだ中で重要だと思ったことは、いわゆるヒドゥン・カリキュラム以外にも、 同じ機能を果たす教育(授業)上の取り組みがあることです。

後藤先生は、ヒドゥン・カリキュラムを「学び合う学び」の観点から論じられました。ある 意味、定義の拡大を行ったわけですが、そのことによって教育学上の概念用語を、私たちがふ だん行う授業をはじめとする教育活動そのものだと、自分事にしたわけです。これは見事です。 ただ、定義の拡大であることは押さえておいた方がいいでしょう。

最後に見た篠岡中学校の授業は興味深いものでした。教え合いになっているのでは?とか、ディスカッションなのか?(発言者の多くが、教師に向けて発言している)などという批判はできると思いますが、何よりも男女を含めて協力する態度(仲の良さという授業で求める必要のないものまで実現されている)に感銘を受けました。篠岡小中だけで9年間過ごすということは、人間関係が壊れたら修復はほぼ不可能ということでもあります(そういう事例は少なくありません)。その状況の中での姿であることを考えると、本当に素晴らしいものだと感じました。